吾人は玆で尙特に言明するが、「優雅」とは、强力優勢ではなく、之に反し柔かなる力を以て吾人の中に進入し、それかというて都合によると、內部的により深く吾人を捕捉する所のものである。それは、硬固や鋭利や粗野などを帶びないもの、無力ではないが、無爭鬪のもの、內部的自明を有しその本質の十分自然的なる活動をなして、それがある如くあり、又それが爲す所のものを爲すものである。之に於ては、與へられたる前提、存在せる力から、自然恒常的の繼續に於て、中止妨害なく、その可能性を有する所のものが流出する。これは、一切の分裂、一切の不確實なる來往、一切の疑惑、不協和、衝突又は矛盾に迄反對に立ちて、「自由」なるものたるのである。

之を例へていふと、かういふ線は優雅である。卽ちそれに於ては、唯一度きり與へられたる力又は力の交互影響が、如何なる所に於ても險しく入込まず又押し出でず、如何なる點に於ても中止せず又無理に屈曲せず、隨つて全然その本性の如く働くといふが如き線たるのである。

之と同樣に、一の物體の運動は、次の如くある時には優雅である。それが、明瞭なる

運動衝動並に運動された物體の力から、無理、不自然なく、又動搖及び强激なる發端及び終止なく、更に妨害的阻止及び反抗的阻止なしに、簡言すれば自明の性質を以て發出し、又發出するやうに見ゆる時である。

吾人は確言するが、優雅なるものは決して崇高を除斥しない。之は內部性を除斥しないのみならず之を包有する。眞正の優雅は大さを有し、又靜穩と深さとを有するのである。

二　優美（グラツチエ）、美的輕小

右の優雅に反し、此の優美といふものは、より多く外部的のものであつて、より少く靜穩、より少く深奧、又より少く强力なるものである。かの優雅は無意識的にして且つ無意志のものである。或は此の如く見ゆる。けだし自明的のものを吾人は「意志」せず、之に反し自明的にそれを爲すからである。隨つて吾人の意識はそれに附着しない。此の反對に、此の優美は意志し且つ意識され得る。之は、奇妙、誘引挑戰的にして且つ移り氣である。尙此の外に、優美といふものは、自由並に强制、辛勞、粗野、

硬固不協和等の缺損といふ事をば、優雅と共通に有する。

此の種の優美をば、その輕快にして移り氣の形態を有する「ロココ」風（十八世紀の末年に歐洲に於て流行したる裝飾の流風）が有する。「コレッヂオ」の或る形像は優美であり、吾人に知られたるその何ものも優雅ではない。「ラッフハエル」の多くの形像は優雅である。吾人に知られたるその何ものも優美ではない。

終りに美的輕小なるもの、卽ち簡單にして吾人の內心をば、輕易遊戲的に占有する所のものは、かの崇高の全然たる反對である。世人は美的享樂並に藝術一般をば、遊戲と稱する。之は、若しも遊戲をば、實利的に向注された勞作といふものに對せしむるならば、正當である。けれども吾人が玆に語る所の遊戲なるものは、實利的勞作に對立するものではなくて、眞面目といふものに對立するものである。吾人が意味する所の遊戲的のものとは、量、力、又餘りに大なる深さを缺損する所のものである。それは心的生活の輕易なる波動を喚起し、同時に、かゝる波動が無障害に經過する時に輕易爽淸なる快感といふ特殊の感情を喚起する所のものである。

三　喜劇（コミック）、その一般的說明

世には喜劇といふものをば亦崇高に對立せしむるが、併し喜劇と崇高とは、相互に直接なる反對に立たぬ。之と同樣に又、喜劇は、悲劇とも直接なる反對に立たぬ。之に反し、喜劇の固有の反對たるものは、驚くべき偉大のものである。けだし喜劇は驚くべく細小のものであるからである。

されど此の如き喜劇の說明は、尙少しく詳細に限定せねばならぬ。そこで吾人は直に、一般的の言明をなさう。喜劇とは、輕小にして、より少き印象力を有し、より少く顯著重要であつて、隨つて比較的偉大、强い印象力、顯著、重要、崇高なるものゝ代りに現出する所の非崇高のものであると。之は恰も偉大なるものゝ如き樣子をなし此の如きものと言ひふらし、此の如きものゝ働きをなし、さうして次に一の輕小、比較的の虛無として見え、或は此の如きものに迄融解する所のものである。さうして之と同時に、かゝる融解が突然に起るといふ事が必要である。

此の際二種の可能が區別されねばならぬ。第一には、一つの偉大、或はより偉大なる

ものが期待せられ、さうして恰も期待の實現の如く見え、それかというてその輕小の故に此の實現の如く見ゆる事の能きない、より輕小なるものが現出するといふ事である。

第二には或るものが、一のより偉大なるものが期待さるゝが故ではなく、之に反しそれ自身に於て、即ちその性狀、又はその現出する連絡關係、若くはそれに結合する何等かの表象の故に、一の偉大なるもの、又は此の如きものとして現出し、さうして次に此の如き偉大なるものを少しも表現せず、之に反し吾人に對して虛無となるのである。

されどかゝる二つの可能は、決して本質的の反對に立つものではない。二つの場合の各に於ても、上に述べた語句は適用され得る。その語句とは、或るものが偉大なるものゝ如き「樣子をなし」、次にそれが輕小なるものとなるといふ事である。

四　喜劇の感情中に於ける快感といふ要素

右の語句からして、喜劇の感情中に於ける快感といふ要素は理解され得る。かゝる

要素は、固有にして特異なる種類のものである。前既に述べたる如く、喜劇なるものは、高貴なる行爲又は偉大なる意衷の如く吾人を滿足せしむるものではない。之に反し吾人を「面白がらせる」。そこで今の言明に對して更に附加せねばならぬ。かゝる特異なる快感は强烈なるものである。けれども之は、右の如き行爲や意衷から起るより嚴肅にして且つより深く進入する所の快感とは異なつて居る。之は、輕易、無內容、稀薄、空虛であり、さうして表面に立止まつて吾人をくすぐり、吾人の奧深い心魂と少しも交渉をなさないと。

かゝる輕易なる快感は、吾人が既に知得せる如く、一つの事物の把捉に對する精神の自然的用意が、その本性上その事物が吾人の把捉力に對して提出する要求に超越する時に起るのである。

此の事は、上述したるものに基き、喜劇に於ては特にさうである。之が實例として は、吾人は「分娩する所の山」（ゲライセンデ・ベルグ）といふものを擧ぐる事が能きる。吾人は、山が分娩するのを見んとするが故に、大にして强く、隨つて吾人の把捉作用に大なる要求を提出

する所の自然界の驚異といふものを期待する。吾人はかゝるものを期待する。即ち内部的に吾人をそこに置き、それを把捉しようと用意し、かくて吾人の中に於て、その受納に必要なる「場所」を設け、或はその本性が要求するが如き把捉作用の量をそれに供與する。けれども今は大なる自然界の驚異の代りに、輕小にして無顯著なるものが現出する。即ち一疋の鼠が飛出す。而も此の鼠は、吾人が右の大なる驚異を期待した瞬間に飛出す。それは分娩する所の山から飛出し、さうして此の山がそれを産んだ。而も之ぞ卽ち吾人が期待した所のものたるのである。更にかゝる期待が、期待した大なる驚異の用に供與した所の把捉作用を費消し、吾人の中に存する所の全「用意」を利用し、かくて右の驚異を輕易にして遊戯且つ精神的に把捉するに至らしめたのである。

さうして此の如くして、喜劇的の快感は發生する。同時に又、これはかゝる快感が發生し得べき唯一の方法たるのである。

五　喜劇の感情中に於ける不快感といふ要素

以上の如く述ぶるとはいふものゝ、吾人は今、喜劇の感情中に於て快感に加はる所

の尙他の要素に想到せねばならぬ。吾人は喜劇をば悲劇に對立せしめなかつた。けれども一つの點に於て兩者は共通なる所があると謂はねばならぬ。卽ち喜劇の中に於ては、悲劇の中に於けると同樣に、快感の要素と同時に、不快感の要素、或はそれに對する端緒が存するのである。

前述の如き自然界の大なる驚異の期待は、鼠の現出により滿足される。されど又之に於て滿足されない。それは、期待した偉大なるものゝ代りに、輕小なるものが出現したからである。さうして之丈の點に於ては、吾人の期待は失望せしめられる。而も失望は、それ自身としては常に不快感の根據である。此の故に、かゝる不快感の要素が、喜劇に於ては、快感と並列して存するのである。否寧ろ、かゝる不快感の要素は快感の要素と合體して、一の新しい感情、即ち正しく喜劇の感情を構成するのである。

此の種の感情は、自然の理として、不快感要素の量に應じて、それ〴〵相異なる。して又かゝる量は、吾人が期待する所の偉大なるものゝ出現に對し如何に多く吾人が

關心をなし、又如何に強く或は深く、それに對する感興を、平日又はその時に有するかに應じて、異なる。都合によると、それが些少であつて且つ淺くある事がある。然る時には、不快感要素は、大なり小なり快感要素に從屬し、最後には、それが全然氣付かれざるやうになり、吾人は單に面白く感ずるに至るのである。

之に反し他の時に於ては、不快感要素の方が最も判明に感知される事がある。吾人は例へていふと、實利的理由又は倫理的理由又は美的理由よりして、期待したものゝ現出を絶對的に要求する事がある。かゝる場合に於ては、喜劇の感情は、最高の不快感となる。

之に關する一例を擧げると、或る人が、偉大にして嚴肅なる任務を遂行する能力も意志も有するかの如き樣子をなし、次に單に僅少なるもの或は皆無のものを仕遂げるとする。かゝる場合には、彼れは「笑ふべきもの」となる。さうして之と共に、喜劇の感情は、顯著なる不快感性質のものとなる。けだし嚴肅なる任務なるものは遂行されねばならぬが、併し吾人はかゝる遂行をば、その能力と意志とを有するものに對し

て要求するからである。

最後に又、苦くさうして最も苦くある喜劇の感情がある。自己を疑惑する嘲笑の如きはそれである。これは例へていふと、或る人があつて、その或る計畫の一切の望を繫いで居つたのに、不幸にしてその計畫に於て失敗したる場合、若くはその多くの望を抱いて居つた所の全生活をば無に終らしめた場合に、それが起すが如きものたるのである。

茲に吾人は「笑」といふものを擧げたが、人によりては「如何なる時に吾人は笑ふか」といふ問題を起すかも知れぬ。之に對しては吾人は答へよう。例へていふと、笑ふべく吾人が企てる時に、或は吾人が擽られる時に笑ふと。而も此等の場合に於ては笑といふものは、喜劇と何等共通なる點を有しない。又他の場合に於ては、之は喜劇と關係を有し、その自然的の伴隨現象である事がある。されど此の如き場合に於てもそれは必然的に喜劇に附屬しない。吾人は笑といふものをば、禮儀の念慮からして壓伏する事がある。けれども之と共に、吾人は喜劇の感情を壓伏しないのである。之を

簡言すると、喜劇と笑とは、全然異なりたるものである。して又、吾人は、本書では笑でなく喜劇を取扱ふのであるから、此の事は是丈にして置く。

六　喜劇的の表象運動

一切の喜劇に上述したるが如き共通なる點、即ち喜劇的事物が、一つの偉大なるものゝ樣子をなし、次に細小なるもの又は比較的の虛無として現出するといふ事をば、次のやうな語句により表出する者がある。喜劇に於ては二個の要素が繼續する。一つは昏迷(フェルブリュッフング)であつて一つは悟了(エルロイセッフング)であると。その實喜劇は此の如く一般的に說明する事が能きる。玆にいふ昏迷とは、喜劇的のものが、先第一に多量の把捉力を要求する事をいふのである。次に悟了とは、それが虛無と現出し、隨つて把捉力を再び要求する事が能きないやうになるのをいふのである。

昏迷と悟了との此の繼續は、尙他の心的運動を來さしむるのであつて、吾人にして喜劇的體驗の性狀を十分知得しようと欲するならば、之を叙說するといふ事は必要である。今や注意といふものは、期待を滿足せしめ、それかというて滿足せしめなかつ

た所のものから轉じて、それを喚起せしめた所のものに迄復歸する。卽ち蓄積された統覺波は、それが通常爲す如く。流れ歸る。そこで吾人は問ふのである。「此の如きは何の爲であるか」と。而も此の疑問をより精密に限定すると、此の如き事が如何にして可能であるか」といふ事になる。詳しくいふと、かの山が分娩したといふのに、如何にして鼠が飛出すといふ事が可能であるかと問ふが如きである。

此の如く問ひ來ると共に、吾人は再びかの山及びその分娩に到達するのである。之に於ては期待は起りさうして之が新たに失望せしめられる。今や想像が始めから試みられ、暫くの間は彼是往來する。此の際波といふものは漸次に退却する。簡言すると喜劇的表象運動は、己れ自身の中に於て消滅し去るのである。

七　主觀的喜劇への移り行き

右に擧げた喜劇の實例は、「期待」が滿足され、それかというて失望せしめらるゝ所のものに屬する。かゝる實例の種類に對立して、上に述べたる如く、滿足及び失望せしめられた期待といふ概念の入るべき餘地のないものが存する。少くとも或る實例に

於ては、此等の概念がより少く適合する。今此の如き場合を簡單に叙說しよう。

吾人にして餘りに太つた「ビール」樽のやうな人を見て喜劇的に感ずるならば、此の場合には、吾人は滿足しさうして失望せしめられた期待といふ事を語るのである。吾人は恐らく「期待」する。人間の身體といふものは、常に身體であり、活躍、運動、生活官能等に役立つもの、身體に負はせられた任務に應當するものであるといふ事を。ところが此の如きものゝ代りに、吾人は、不用、妨害的にして、人間に添附され居つて何ものにも役立たず、彼れの生存及び身體的官能を妨害する所の肉塊の如きものを發見するのである。

されどかゝる場合に於ては、期待といふ概念は、前の場合と同一の意義、即ち或るものが現出又は提示されるであらうといふ事を期待するといふ意義に、解釋されて居ない。

されど之以外の場合に於ても、滿足しさうして失望せしめられた期待といふ事を益〻多く語ることは能きぬ。

そのやうな場合とは、機智的の喜劇（ウヰツチーダ・コミック）、簡言すれば頓智といふものである。

之を例へていふと、或るものが機智的の發言をなすとする。ところが之は次のやうな事を意味するのである。彼れは、或るものを言明したり、或る意義の帶有者であつたり、又或る眞理を通告したり立證したりしようとの要求を提出する所の發言をなすと。かゝる發言は、吾人の眼に對しては、此の要求を提出する。此の發言は、暫らくの間は、吾人に對し、多少の論理的重量を有する。されど後になるといふと、之は一の遊戯となる。例へば同一の音を有する語となるが如きである。けだし音の同一といふものが、吾人を横道に導き、次にはそれがある如く論理的の無のものとなる。隨つて又語の論理的重量は溶解される。即ち此の語にして、吾人に對して論理的重量を有する限りに於ては、之は吾人の注意を要求する。次にかゝる要求が消滅する。さうなると、注意といふものは今やその語に向けられる。かくて要求が消滅した後にも、語は注意を牽引する。此の故に語といふものは、それが要求し得るよりも、より多量なる注意を受くる。さうして、把捉さるべくある所のものゝ要求を越えての注意のかゝ

る過量、即ち把捉に對する吾人の過重は、此の場合に於ても、面白いといふ感情を發生せしむるのである。之に對して、前に述べたと同一の理由よりして、不快感の要素が加入する。最後には、均しく上と同一の理由よりして、茲にも表象連動の來往が起るのである。

八　客觀的喜劇、主觀的喜劇、素朴的喜劇

以上の如く說き來るといふと、喜劇の二つの根本的に異なりたる種類が發生するのである。右の第一に擧げた場合は、客觀的喜劇の場合であつて、之に反し機智的發言は、滑稽即ち主觀的喜劇の範圍に屬する。既に述べたる如く、主として前者に於ては、滿足されそれかというて、他の意義に於ては滿足されない期待といふ概念が適用せられ得る。然るに後者に關しては、吾人は一般的に言明するのである。或るものが、始めには一の偉大なるものゝ如き樣子をなし、次には吾人の眼に於て輕小のものとなる。かくて同一のものが、直接に相繼いで二つの光明に於て現はれる。第一は顯著、重要なる或るものとして、第二には無顯著なる虛無の或るものとして現はれると。

尙此の外に、客觀的喜劇と主觀的喜劇とは、その名稱の示すが如く相互に對立する。前者に於ては、一の人間とか物とか現象とかゞ、客觀的に偉大なるものゝ樣子をなす。即ちそれが幾多の性狀を具有したり徵候を帶びたり相當に重大なる作業をなしたりする所のものゝ如き樣子をなす。然るにその次には、かゝる性狀、徵候、能力の帶有者として顯現しない。之に反し主觀的喜劇に於ては、言語とか容貌とか行爲とかゞ、或る價値、意義、眞理等の帶有者の如き樣子をする。此等の言語等は、吾人に取りて或る思想的內容の記號であり、かゝる思想的內容をば吾人は此等に對して與へ、次には之を斷念し去る。かくて言語や容貌や行爲は、吾人の眼に於ては、一の論理的重量を有し、次には之を有しない事になる。さうして論理的重量の此の種の存在と消滅とは、實に主觀的喜劇の特質を構成するのである。

最後にかゝる二つの可能に對して、第三のものが對立する。即ち主觀的喜劇と客觀的喜劇とに對して、素朴的喜劇といふものが存するのである。之に於ては、偉大と輕小との反對は、是立脚點の反對である。之に關して若しも吾人にして外見と悟了とい

ふ語を用ゐようとするならば、然る時に吾人は云はねばならぬ。外見は純粋喜劇に於て發生する。けれども吾人にして或る一つの立脚點に居る間は、それは單なる外見ではない。さうして若しも吾人にして他の立脚點を取るならば、此の外見は消滅して悟了なるものは現出すると。

ところが茲にいふやうな「立脚點」とは、一方に於ては素朴的人格のそれであり、他方に於ては、吾人自らの現實的立脚點或は假想的優越なる立脚點たるのである。

之を例へていふと、吾人が、一の素朴的顯現、例へば一の兒童の顯現を兒童的本質の連絡中に置くとする。或は之をば此の立脚點から考察するとする。此の際には、此の顯現は、吾人に對して、正當、眞實、都合によると巧慧に見え、各の場合に於て兒童的本質の表出の如く思はれ、隨つて吾人に取りて、兒童的本質が有する所の崇高なるものを帶有する。次に吾人は、かゝる顯現をば、兒童的本質の連絡から取去り、之をそのある如く認め、さうして慣例、風習、吾人の思考、吾人の本質の連絡中に置き、此の立脚點から考察して見る。さうすると、今や此の顯現は、吾人に取りて無價

値、拙劣、錯誤のものと見え、巧慧ではなくて愚鈍のやうに思はれる。かくてこれは、その固有の價値を失ひ、前のものと比較しては、もはや何等の價値をも殘有しないやうになる。而も此の如くある事が是素朴的喜劇の本義たるのである。

九　喜劇の三種類

茲では、客觀的喜劇、主觀的喜劇、素朴的喜劇の三者中に包括せらるゝ下序の種類の擧述をなさぬ。唯客觀的喜劇の三種に就いて述べて見ようと思ふ。それは道化喜劇（ボッセンハフター）、茶番狂言的喜劇（ブルレスケ）、及び奇怪喜劇（グロテスク・コミッシエ）である。

道化喜劇とは粗野なる喜劇であつて、隨つてそれに關して吾人は微笑しなくて心から笑ふ。即ちたとひ好意を以てゞあるとはいへ、吾人は嘲笑したり、失笑したりするのである。

されど此の如き言明に對し、一の補説を加へねばならぬ。吾人は各人に自然的に固着發現し、さうして吾人から彼れに對して認識するといふ粗野なる喜劇をば、道化喜劇と稱しない。之に反し、唯計畫されたもの、作爲されたものをば此の如く呼ぶので

ある。かくて道化喜劇とは、他のもの、又は己れ自らをば、喜劇的に見えしむべき有意的方法を指すのである。

此の故に道化喜劇とは、先第一に、働作或は諧謔の喜劇であつて、即ち諧謔が、痴鈍、不器用、臆病、都合によると甚だ周慮、悧巧、熟練、勇敢に見えたり又は樣子をしたりする所のものに對して加へられ、此等の性狀を現出せしめて笑に供するものである。

次に何人かゝ、喜劇的方法に於て、己れ自らをば、痴愚、不器用、臆病者等として表現若くは假托し、その身體的缺陷を笑に供するとか、又は、彼れが、痴愚、無骨、臆病者等の缺陷ある者を演出し、かくて笑に供する時も、道化喜劇たるのである。

最後に又、笑を起さしむる所の言語又は形狀に於ける表現の喜劇も、亦道化喜劇である。此の際、その喜劇が、全然現實に屬する事項、或は假想的の失笑事項を叙述しようと、將た之を物語つたり報告したり若くは譬諭的に飜譯したりしようと、或はそれが人間又は事物をば、叙述の方法によりて可笑的のものと見えしめ、又はそのやう

なものと爲したりしようとも、兎に角道化喜劇である。殊に又、諧謔者自ら、或は他のものをば、粗野なる喜劇的光明に於て現はれしむる所の諧謔も亦、道化喜劇たるのである。

凡て此等の場合に於ては、容易く了解せらるゝ如く、「道化」といふ語は、喜劇又は喜劇そのものゝ固有の賓辭ではなく、之に反し、吾人が依りて以て、喜劇的結果の發生に到達する所の意識的の人間的行爲を示さうとする所の賓辭である。卽ち一の働作の提供法が道化ではなくて、働作そのものが道化である。又道化を假托する所の痴愚ではなくて、その演出が道化である。言語及び形狀に於て表出された可笑的事項ではなくて、その表現が道化である。同時に又、かゝる表現そのものではなく、之に反しそれが一定の內容を有したり、或は一定の手段を以て、かゝる特定の喜劇的結果を發生せしめたりする限りに於ての表現である。

此の道化喜劇の次に來るものは茶番狂言的喜劇である。之に關しては吾人は直に言明せねばならぬ。茶番狂言とは、實は喜劇の一定の種類又は一定の性質に對する名稱

ではなく、之に反し、或るものを喜劇的に見えしめたり、若くは喜劇的内容或は結果を有する表現の方法に對する名稱であると。若しも吾人にして、擬詩的(パロディヒシ)にして且つ戯作的なる喜劇的表現を茶番狂言と稱するならば、そは歴史的並に言語の使用上十分正當である。

最後に吾人は、かういふ喜劇的表現をば奇怪喜劇と呼ぶ。それは、戯畫、誇張、牽强附會、怪異、奇想等のものをば、喜劇的効果を發生せしむるに就いての手段に使用するものである。

十　性格喜劇と命運喜劇

右に述べた喜劇の區別よりも尙一層重要なるものは、第二の區別であるから、今之を叙說して見よう。吾人は前に、悲劇に於て二つの可能を區別した。一に於ては、悲劇の主人公に來る所の苦腦が、彼れの責任なしに、その命運から蒙むらせられた災害であつて、他に於ては、主人公の本質中に存する惡の爲にそれが責任を負ふと。さうして前者をば命運悲劇、後者をば性格悲劇と呼んだ。吾人は、今かゝる反對を尙一層

一般化する事が能きる。即ち一切の不可存在物は、事物又は人間の本質中に附着するもの、即ちその性狀であるか、若くは事物又は人間の上に來る所の損害或は否定であると。さうして前の場合は性格の致さしむる所であつて、後の場合は命運の致さしむる所たるのである。

更に又、喜劇といふものは一の不可存在物又は一の否定である。之は吾人の眼に於ては虛無になる事である。さうして此の種の否定も亦、事物又は人間の本質中に存する事もあれば、又事物又は人間に關する命運から來さしめられる事がある。吾人は、かゝる二つの可能の反對をば、かの悲劇の之に該當する所の可能を表示するものと均しい名稱により表示する事が能きる。即ち前の場合に於ては性格喜劇、後の場合に於ては命運喜劇といふものを語り得るのである。但し此の二つの場合に關しても、吾人は主として人間に附着したり落下したりする所の喜劇の事を思念し居るのである。

第八章　滑稽(コモード)

一　喜劇と滑稽

吾人は本書では、美學上から喜劇を論究して居る。けれども喜劇そのものといふものは、ちやうどそれ自身に考察された苦惱と同樣に、美的には無價値のものである。さうして既に述べたる如く、喜劇といふものは否定である。即ち吾人の眼に於ては、虛無に迄の轉落である。此の故に、喜劇に於ては、吾人に何ものも與へられなくて、或るものが取去らるゝのである。

されど此の如く言說する事に對して、或は異論を試みる者があるかも知れぬ。曰く右の如くあるにも拘はらず、喜劇に於ては或るものが吾人に與へられる。即ち面白味が與へられる。然るに而白味なるものは快感であつて、さうして美的に有價なるものは是快感であると。けれども又吾人は既に知得するのである。各の面白味は美的面白味ではなく、各の快感は美的價値の感情ではないといふ事を。

さうして喜劇的快感なるものは、二つの理由からして非美的快感に屬する。第一には、「美」或は「美的有價」といふ語は、一の直觀された事物が吾人に對して價値を有

するといふ事であつて、第二には、價値感情なるものは、事物の價値感情であり、直觀された事物の自己價値であるといふ事である。

然るに此の二つの理由は、喜劇的快感に關しては存在して居ない。即ち喜劇的快感なるものは、吾人が喜劇的のものと稱する所の事物に對する快感ではない。之に反し、事物が投入されて見ゆる所の精神運動に對する快感である。詳しくいふと、之は、事物が一の心理的重量を有するやうに見え、それかといつてそれを有しない、又は有しないやうに見ゆるといふ事實に對しての快感であつて、簡言すると、吾人の把捉作用の働き方に關する快感たるのである。

喜劇に對する快感は、かの「知力的」快感と同樣のものである。知力的快感とは、認識の事物に對する快感ではなく、之に反し事物を對象とする精神的現象に對する快感、即ち認識に對する快感、事物が吾人に了解されたといふ事に對する快感である。さうしていふ迄もなく、之に於ては、喜劇に於けるやうに、一の消滅ではなくて、此の反對に、或るものゝ構成、即ち認識の連絡の構成といふものが、知力的快感の根據と

なるのである。

さうして此の如く言說すると共に、第二のものが與へられるのである。それは、喜劇なるものは、それ自身に考察すると、美的內容、人間的價値、吾人が同感しながら體驗する所の生活々動といふものを缺損するといふ事である。

但し此の如くあるといふ事は、喜劇が、苦惱と同樣に、美的價値感情を起すに就いての可能的手段であるといふ事を妨げない。それは、苦惱の如く、一の否定であるといふ事そのことの爲に、此の如き手段となり得る。吾人は既に知得した。人間的價値なるものは、それが否定されて見ゆる時には、より透徹、より顯著になり、さうしてより强烈なる方法に於て享樂されるといふ事を。

此の如き事は、たとひ否定といふものが、喜劇的のものであり、價値の帶有者が喜劇的に否定せらるゝ時に於ても、成立する。一體苦惱に基く否定、人間の存在に迄の苦痛なる侵害といふものは、悲劇を發生せしむる。之と同樣に、喜劇に基く否定、人間の存在に迄の愉快なる侵害は、之から述べようとする滑稽といふものを發生せしむ

る。要するに喜劇なるものは、それが滑稽に於て積極的價値の要素を受納する事により、美的價値を取得するのである。

二　素朴的喜劇と滑稽

喜劇から滑稽に迄の移り行きは、吾人が素朴的喜劇と稱した所の喜劇の種類に於て最も直接に仕遂げられる。恐らくは之に於ては、移り行きは既に仕遂げられたかも知れぬ。一體眞正の素朴的喜劇なるものは、喜劇であると同時に崇高である。吾人は兒童の天眞爛熳中に於て、兒童的本質を見、かくて此の中に崇高が存する事になる。勿論かゝる崇高といふものは、吾人大人の立脚點からすると、消滅する。或は之を消極的に表出すると、吾人にして、その天眞爛熳をば、兒童的本質との連絡から取去るならば、かく消滅し去るのである。併しながら此の天眞爛熳は、尙その中に內屬する。さうして上に語つた所の昏迷、卽ち心理的蓄積といふものは、吾人の注目といふものを取返す。そこでその天眞爛熳にして、常識、便宜、熟練、優越等に益ゝ多く矛盾すればする程、吾人の注目は益ゝ痛切に、兒童的本質の上に復歸する。而もかゝる本質

中に於て、或はその自然的顯現として、右の天眞爛熳が、今や全然異なりたる光明、即ち崇高といふ光明に於て現はるゝのである。かくて喜劇的過程中に纏綿された崇高は新に顯出する。さうして最後に、その崇高は、それが固守し得た所のものとなり得る。卽ち吾人大人が、吾人の立脚點から提出する要求に對してのその矛盾は、かゝる崇高の下に從屬する。さうして此の如き從屬をなす事により、此の矛盾は、崇高を一層透徹的のものとならしむるのである。

此の種の從屬は、次のやうな場合に、事實的に仕遂げられる。それは、一方に於ては、吾人の熟練、便宜、禮儀等の要求の考察、他方に於ては兒童的本性の考察に於て前者の價値が、そのある所のもの、卽ち單に比較的のものとして見え、此の反對に、本然の兒童の意義が有する所の絕對的價値が意識中に來る場合たるのである。

之は、吾人が前に、悲劇に於て說述したと同一の事實關係である。卽ち否定、與へられたるものが吾人の要求する所のものに對する矛盾が、吾人の注目をば、否定されたり、矛盾に逢うたりする所のものに强ひて向けしめ、吾人を內部的にそのものに近

接せしめ、吾人に對するその價値を一層透徹的のものとならしむるのである。

併しかくあればとて、悲劇と滑稽との間の差異は、依然として存立する。その差異とは、前者に於ては、否定が嚴肅のものであつて、卽ち災害に基く否定であり、苦惱であるのに、後者に於てはその否定が喜劇的であるといふ事である。

而も此の如く說述するといふと、滑稽の意義は說示されたのである。卽ち滑稽といふ語は、崇高又は何等かの方法で人間的に顯著なるものが、喜劇的に否定される。換言すると、それが喜劇の過程中に於て沒落したり消滅したりする。併しながら又、その否定又は否定さるゝ所のものゝ爲に、その印象性は增進するといふ事である。否その印象性の增進するといふ事の代りに、吾人は、それに關する吾人の共同體驗が、より深く且つより有効のものとなると、言明しよう。

同時に、かく言明すると共に、滑稽に伴ふ感情の特性も確定されるのである。卽ちそれは混合感情であつて、喜劇の感情の効果が、崇高感情の條件の下に從屬する事によつて發生するのである。之は喜劇中に於ての又喜劇によつての、崇高の感情たるの

である。

三　滑稽の三種の存在法

吾人は今、滑稽といふ概念の異なりたる適用法を區別せねばならぬ。さうすると、滑稽の存在法には種々ある事になる。尙之をより精密にいふと、その三種がある事になるのである。

第一、吾人は、世界、それに於ける行爲と働作、最後に己れ自らをば、滑稽的に觀照する。此の場合に於ては、滑稽なるものは、吾人の中に於ける一の狀態、吾人自らの感情狀態を意味する。勿論喜劇的のものは客觀的に與へられてある。けれどもその場合の崇高は、吾人の崇高である。即ち吾人が體驗したり發見したり、或は觀照しながら吾人をその中に沈潛せしむる所の、喜劇に關しての崇高である。さうして此の如くして起る滑稽は、美的滑稽ではない。即ち事物の美的觀照に於て吾人が發見する所の滑稽たるのではない。

第二、吾人は或る一つの表現の中に於て、例へば詩歌の中に於て、敢へて表現されたものではなく、その表現の方法が滑稽を包有するといふ意義に於て、滑稽を發見する。即ちその表現といふものは、滑稽なるものそのものゝ表現ではなくて、之に反し滑稽的表現たるのである。吾人はかゝる表現の中に於て、それ自身に於ては崇高でなく、此の反對に單に喜劇的であるといふ、表現された喜劇に關する崇高を發見する。かゝる滑稽は是美的事實たるのである。

或は又吾人は之を次のやうにいふ事も能さる。滑稽、切言すれば滑稽的表現なるものは、敢へて事物の關する所ではなくて、詩人その人の司る所であると。けだし詩人なるものは、その表現の方法により、世界に關する自己の滑稽的解釋、並にそれに對する關心を明示するからである。さうして此の如くあり限りに於ては、かゝる滑稽は是抒情詩の範圍に屬する。抒情詩の特徴とする所は、詩人が、それに於て、自己の內部的態度を明示し、己れ自らの理念的自我を「告知」するといふ點にあるのである。

第三、最後に滑稽は、その語の十分なる意義に於て、客觀的のものとして現出する事がある。即ち表現されたる事物中に於て、特に表現された人間そのものゝ中に於て

滑稽が存するのである。言ひ換へると、此等に於て、啻に喜劇が存するのみならず、更に喜劇的過程によりてより痛切になる所の崇高といふものが存する。かくて吾人は藝術的に表現された滑稽的人物に接するのである。

四　滑稽の三個の段階

滑稽の以上の如き三分割の外に、吾人は尙他の三分割を附加する。卽ち今は、喜劇の三種の異なりたる存在法ではなくて、その三個の異なりたる段階を述べようとするのである。吾人はかゝる段階をば、和解せる滑稽、不和の滑稽、再和解の滑稽と稱する。此の第一は、狹義に於ける滑稽であつて、吾人は之を諧謔的滑稽（ユモリスチッシェ・コミール）と稱する。第二は譏刺的滑稽（サチリッシェ・コミール）、第三は諷刺的滑稽（イロニッシェ・コミール）である。

滑稽の此の種の三個の段階は、先第一に吾人の世界觀の滑稽の可能なる段階である。

吾人は第一に、世界に對し、かういふ時には狹義の滑稽的態度に出づる。それは、吾人が、世界に於ける輕小なるもの、些末なるもの、可笑的のもの等を見、それかと

いうて笑ひながらそれの上に超越する時である。換言すると、凡てそれにも拘はらず、吾人を維持し、世界に對する吾人の信念を確保する時である。

第二に、吾人の世界觀の滑稽は譏刺的滑稽となるのであつて、それは、吾人が、可笑的のもの、愚鈍なるもの、轉倒せるものをば、その卑賤、不合理に於て認識し、さうして吾人、並に善であり又あるべくある所のものに關する吾人の意識をば、それに反對に立ちて自己主張をなさしむる時である。さうしてかゝる兩反對は、常にいふ所の「譏刺」の意義中に存するのである。

第三に、吾人の世界觀の滑稽は、次のやうな場合に諷刺的滑稽となる。それは、吾人が、可笑的のもの、愚鈍なるもの、轉倒せるものをば、啻に認識するのみならず、同時に、そのもの自らが矛盾に陷るといふ事の意識、一切の不可存在物は、究極する所かの「ッオイス」を面白がらする事に役立つに相違ないとの意識を有する時である。此の際、虛無なるものゝ自己消滅といふものが、「諷刺」の特徴であるといふ事が、認められたるものとして假定されてある。

此の如く述べ來るといふと、同時に、狹義に於ける滑稽的表現、譏刺的表現、諷刺的表現の反對は何であるかといふ事は判明するのである。言ひ換へると、上述したるものに基き、此等の表現たるや、敢へて、和解、不和、再和解の滑稽の帶有者ではなく、之に反し、それは虚無或は喜劇的のものを提示し、同時にかゝるものに對し、吾人の感知し共同體驗をなし得べき方法に於て、和解的の滑稽、譏刺的の滑稽、諷刺的の滑稽といふ態度に出づるのである。

此の種の「滑稽的表現」は、既に述べたる如く、その本性上からすると、抒情詩的のものである。尚又、之は、大ざっぱに通常「譏刺」と稱せらるゝ所のものとも一致する。

併し此の如き際には、譏刺といふ語は、上に假定された意義よりも、尚一層廣い意義に解釋される。そこで吾人にして、譏刺の如きより一般的なる概念を棄却するならば、然る時には、第一に狹義に於ける「滑稽的」譏刺といふものが殘る。それは、詳しくいふと、世界に於ける轉倒せるものに對し嘲笑をなす所のものである。第二には嘲笑

的譏刺がある。それは、轉倒せるものに對し、不可不の意識に關する感憤を對立せしめて、それを懲罰し處刑する所のものである。第三に、諷刺的譏刺といふものがある。それは、懲罰し處刑をするが、併し同時に、虚無のものは己れ自らを消滅せしめ己れ自らに於て和解をなすといふ意識を有しての事である。

されど、譏刺といふ語の此の種のより一般的なる適用に反對して、吾人は茲では、吾人の狹い概念を用ふる事にする。即ちそれは、和解的滑稽、譏刺的滑稽、諷刺的滑稽の區別である。此の如くするといふと、譏刺とは特に右の第二の種類の譏刺である。それは即ち「悲觀的」譏刺と稱するものである。されど名稱なるものは、事實に何等の影響を及ぼさない。人にして若しも吾人の名稱に贊同を表しないならば、譏刺的滑稽の代りに、不和的滑稽又は不和解的滑稽といふ語を用ゐたらよい。

最後に滑稽の茲に擧げたる三段階は、客觀的滑稽、或は表現的滑稽といふものに於て、その價値を取得する。

五　客觀的滑稽の段階　命運滑稽と性格滑稽

吾人は今、上述の如き三個の段階に對し、均しく上述した所の命運喜劇と性格喜劇との反對から自然に發生する所の、滑稽の二個の種類を附加せねばならぬ。それは卽ち命運滑稽と性格滑稽との反對である。此の種の反對は、かの命運喜劇と性格喜劇との間の反對に正しく該當するものである。そこで命運滑稽とはどんなものであるかといふに、それはかういふ時のものである。卽ち一個の人間に落下し來る所の命運の喜劇中に於て、人間的に顯著なるもの、或は比較的に崇高なるものが、その人間中に於て現出し、さうしてその喜劇なる事によりその印象力を增進するといふ時のものである、更に他方に於ては、如何なる時に性格滑稽は存するかといふに、それは、一個の人間に附着する所の喜劇的のもの、可笑的のものが、その人間の人間的顯著なるものをより明瞭なる光明中に推進したり、或は人間的顯著なるものが、かゝる人間により始めて現出するといふが如き時たるのである。

命運滑稽或は性格滑稽なるものは、第一段階の滑稽、卽ち和解せる滑稽である。之は、表現された人間が、その喜劇的命運にも拘はらず、或はその本質中に喜劇的のもの

があるにも拘はらず、吾人の眼に於ては尙價値あるものであり、さうして喜劇的要素に反對して、それ自身に於てか又は根抵に於てか、善良、公正、堪能又は優越なるものを吾人に表現する時に存するものたるのである。

次に客觀的滑稽の第二段階に於ては、吾人は明白に命運滑稽と性格滑稽とを區別する事が能きる。第二段階の命運滑稽、隨つて譏刺的命運滑稽の特徵は次の如くある。滑稽の帶有者が、喜劇的命運に遭逢して、嘲笑せられ、かくて外部的に考察して喜劇的に消滅せしめられるといふ事である。されど彼れは、善及び理性の意識、その公正及び堪能をば、喜劇的命運に對立せしむる。此の如くして、彼れは彼れが本來ある所のものに立止まり、嘲笑に對して嚴然その正當を主張し、此の極、內部的には、喜劇的命運よりもより偉大なるものと顯現する。さうして吾人は彼れが嘲笑せらるゝ事により、益ゝ多く彼れを愛するのである。

此の如き第二段階の命運滑稽に對立するものは、譏刺的の性格滑稽である。之に於ては、一個の人間に於ける笑ふべきもの、愚鈍なるもの、道德的に轉倒せるもの等が

一の偉大なるものゝ如き樣子をなす。此等のものは、その權利を要求し遂にそれを取得し、都合によると名譽と尊敬とを博する。けれども後には、かゝる假面が彼れに取去られ、かくてその赤裸と虛無とに於て現出するのである。

此の種の滑稽に於ては、崇高なるもの卽ち「理念」が、先第一に、命運、出來事中に存する。卽ち命運とその中に支配し居る所の力とは、虛無のものをば、單に露出せしむる事により、消滅せしむる。吾人は右の理念をば、正當のもの、外部的ではなく內部的に强大なるものと感ずる。卽ちそれに對して、かの手足を伸ばし傲然脹大して居る所の虛無が、無益に然く手足を伸ばし傲然脹大すると感ずるのである。

次に吾人は、命運といふものが人間の中に於て凝縮されるのを見る。卽ち人間が可笑的のものを露出し、さうして彼れの中に於ける善良、堪能なるものが、それに反對して興起し、かくてそれを笑に委するのである。

尙之より以上の進步といふものは、かの傲然脹大した所のものが、理念の威力を感じ、自己の不當なる要求に就いて赤面するとか、又は內部的に消滅せしめられる時

に、遂行される。

次に之よりして、諷刺的滑稽、特に諷刺的性格滑稽への移り行きは仕遂げらるゝのである。

されど吾人は玆では、命運滑稽をば先に說明する。此の命運滑稽なるものは、人間がその責任なくして投入せらるゝ所の喜劇的命運が、それ自身にその結果に於て分裂粉碎さるゝ時に發生する。之に於ては、理性的にして善なるものが、啻に內部的に優勢なるのみならず、外部的にも强力となるのである。さうしてかゝる理性的にして善なるものゝ勝利を助くる所のものは、實に喜劇的命運そのものたるのである。

それから第三段階の性格滑稽に於ては、趣は之に異なる。之に於ては、一の可笑的のものが、一人若くは數人の本質中に於て現出する。されど「理念」といふものが、人間又は人間の中に於ける可笑的のものに打勝つ。かくて人間といふものは、喜劇的に消滅せしめられたり、又消滅せしめられたやうな感じを起す。彼等は健全なる理性の下に屈服する。彼等は最後に理性的になる。但しそれは偶然ではなく、之に反―非

理性的のものが働いた結果として此の如くなる。非理性的のものは、彼等の中に於て己れ自らを否定し、さうして如何にそれが非理性的であるかを悟得する。今や之は、その非理性的の行動を棄却せねばならぬ事になるのである。

第九章　美の變形に對する補説

一　醜の消極的價値

既に述べたる如く、苦惱と喜劇とは、それが一の否定であるといふ點、即ち不可不存在物、願望、有價、崇高なるもの等の否定であるといふ點に於て一致する。兩者は不可存在物である。さうしてそれが直接に觀察せられ、一の感官的のものゝ中に於て直接に與へられてある限りに於ては、それ自身に考察せられて醜である。けれども此の種の醜は、美、或はその印象に役立つ。それは、一種特異なる美を發生せしむるのである。

此の如くして、醜なるものはいつでも否定である。かの美といふものが、直接に觀

察された積極性の人間的のもの、或は此の如きものゝ自由なる生活營爲であると同樣に、醜なるものは、之とて前既に述べたる如く、積極性の人間的のもの、或は此の如きものゝ自由なる生活營爲の、直接に觀察された否定である。之は、柔弱、萎縮、缺陷である。之は、その本質に於ける積極性の人間的のもの　內部的反對、衝突、矛盾、損傷、妨害等である。或は又、其の自己活動、自己作業、自己享樂等に對する妨害である。

積極性の人間的のもの、並にその自由なる自己活動は、美の內容を構成するのであるが、之は、上に既に述べたる如く、それ自身に於ては倫理的有價のものである。積極性の人間的のものは、一の善である。又自由なる自己活動、その可能、並にかゝる可能を來さしむる所のものも、凡て善である。

されど善には、惡及び柔弱が對立し、又積極性の人間的のものゝ自由なる自己活動の妨害、苦惱、及び苦惱を來さしむるもの、災害等も、善に對立する。此の際記憶すべきは、惡といふものも、柔弱と同樣に、一の缺陷であつて、さうして惡にして力で

ある限りに於ては善であるといふ事である。

此の種の倫理的無價値のもの、一の柔弱、一の災害、簡言すれば生活の否定なるものは、常に醜の内容を構成する。されど此の如き言明は直に、醜が一の倫理的無價値のもの、又は倫理的無價値のものが一の醜であるといふ事を意味しない。之に反し「醜」は「美」と同樣に、或る感官的に與へられたるものゝ賓辭である。されど感官的に與へられたるものは、その倫理的有價のもの、又は吾人がその中に感じ込む所の生活の肯定の故に美であると同樣に、醜といふものは、吾人がその中に、倫理的無價値のもの、又は生活の否定を感じ込む所の(さうして此の如き感じ込みをなす限りに於ての)感官的に與へられたるものたるのである。

二　消極的の感情移入作用の對象としての醜

右の終りに述べた感情移入作用は是消極的の感情移入作用である。即ち吾人は、内部的存在及び態度の或る方法をば、内部的に模倣する。併しながらその模倣をするのは、敢へて吾人がそれに一致し、吾人自ら自由意志的にそれを實行するといふ意義に

於てではない。之に反し、かゝる方法そのものが、吾人の中に進入し、吾人が吾人自らを抵抗せしむるといふ意義に於てである。吾人は今や、吾人に進入する所の内部的存在及び態度の方法をば、吾人自らの本質の否定、並にその否定の要求として感ずるのである。

併し此の如く感ずるに就いては、かのやうな自己進入を假定するのであるが、之に就いては次のやうな事を記憶して置かねばならぬ。唯同種類の己れ自らの内部的態度とならうといふ、直觀された内部的態度の傾向、例へば直觀された臆病、粗野等を内部的に模倣すべく、體驗された請求、隨つて吾人に於て吾人自らの同種類の内部的態度を實現すべき請求のみが、吾人を臆病又は粗野に感じないやうにとの吾人本性の要求と、可感的矛盾に立つ。且又、聽取された判斷を吾人に於て下すべき傾向或は請求のみが、吾人の本性中に根據された反對の判斷と、可感的矛盾に立ち得るといふ事である。

吾人に對して醜を發生せしむる所の此の種の消極的の感情移入作用は、右の如くあ

るが故に、二つの方面を有する。さうして結局吾人は、之に於ては唯二つではなくて三個の要素を區別する事が能きる。之は、第一には、吾人の中に於て、吾人自らの本質の要求といふものが起るといふ事である。第二には、かゝる要求が事物の請求によつて喚起されるといふ事である。第三には、兩者の對立からして、事物の請求と吾人自らの本質の要求との對立が發生するといふ事である。

されど此の種の對立は、それ自身としては積極性のものである。之は醜の意識中に於ける積極的核心である。此の故に、消極的の感情移入作用なるものは、唯感情移入作用としてのみ、消極的のものであるのである。尙此の外に、之は吾人本質の積極的活動である。啻に自由意志的に遂行さるゝ所の活動であるのみならず、己れ自身に於て妨害し否定さるゝ所のものである。

さうして此の如き點に於て、醜の感情の倫理的價値といふものは存するのである。此の種の感情は、否定に對する、健全にしてそれ自身に於て强い生活力の個人の反動である。同時に又此の如くあるよりして、如何にして醜の感情が消失さるゝかも判明

する。即ち人格が、一の健全なるものであるべく止み、自己主張及び反動の能力、簡言すれば生活肯定の能力を失ふ程度に應じて、それは消失するのである。

三　醜の積極的價値の可能

醜の消極性の美的價値には、その積極的價値といふものが對立する。醜の積極的價値とは、それが美の媒介者となる事が能き、さうして美の增進的要素としてその中に進入し、同時に又、美に對して質的特性を與へるといふ事である。

之に就いては前に屢〻語つたが、玆ではそれを詳述して見よう。

それ自身に於ての醜、卽ち缺陷、萎縮、簡言すればそれ自身に於て美的無價値のものは、先第一に、美の背景、外圍、周邊となり、之からして美をば强い印象力を以て興起せしむる。されど此の際、決して單なる興起をなさしむるに止まらない。即ち美が此の如き外圍の中に於てあり、此の如き地面から發生するといふと、それを存在するに至らしめた所の力なるものは、より大に且つ嘆稱すべきやうに見ゆるに至るのである。荒凉たる外圍に於ける美なる自然生活は、たとひ條件が甚だ不利益であるにも

拘はらず、尙生活、而も美なる生活を作造するといふ、自然の力の表象を喚起せしむるのである。自然といふものは、今や特殊の力によつての束縛から己れを解放し、さうしてかゝる束縛に抵抗して生活を作造するやうに見ゆる。之と同樣に、道德的善の力は、吾人が卓越せる人間をば、劣等、軟弱、無力なる外圍の中に於て見る時には、偉大に見ゆるのである。

されど他方に於ては、醜といふものは啻に美の背景或は外圍となるのみならず、直接に美の存在に對する條件となる。それは、それ自身の中に於て、之に對する特殊の力を有する。けだし特異なる自然生活は、啻に日光の輝く高地に存するのみならず凹んだ暗い低地にも亦存する。即ちかゝる低地に迄その本性上親近されてある所の自然生活がある。之を例へていふと、沼澤に於てのみ成長する所の花の如きはそれである。之と同樣に、生活の高地に於て見らるゝ所の人間的の美が存するのみならず、その低地、即ち貧苦、不幸、壓迫の中に於ても、かゝるものは存するのである。

更に又、醜といふものは、それに對して善が反抗し、己れを主張保持し、恐らくは

最後にそれを壓服する所の一の力として表現する。之に於ても亦、積極性のもの、即ち美といふものがその力を示すのである。凡て力なるものは、常に、爭鬪、固持、征服等に於て始めて現出するものである。之は又、爭鬪の末の屈從に於ても現出する。

けだし何ものによりても妨害されず、遠方なる自由の平地に迄その光明を放つたり或は純粹にして鏡の如く清澄なる水面から輝き出でたりする所のものは、是太陽の光線の美なる方面である。されど又、戰うたり、雲を破つて出でたり、霧を透して現はれたり、最も低い暗黑に迄侵透したり、或は何等かの事物に集注して暗黑から輝き出でたり、沼地から光線を發出せしめたりするやうになるのは、是亦太陽の有する印象性の深い狀景たるのである。

さうして玆に太陽に就いて言明した所のものは、凡ての光明に對しても成立する。即ち一切の活躍せるもの、一切の積極性の人間的のもの、並に之に類似する各のものに就いても成立するのである。

さうして消極性のもの即ち醜なるものは、更に、依りて以て、積極性のもの即ち善

なるものが、喚起せらるゝ所のものであり得る。或は積極性のものは、かゝる醜と戰ふ事によりて發生し、之によりより高遠なるものとなる。結極する所、消極性のものは、淳化し醇精にする所のものたるのである。

四　「歴史」の帶有者としての醜

最後に、それ自身に於て醜なるものが、右に述べたやうな美的作業の何ものをも爲さなくて、積極的内容を有する所の一の歴史を語る事がある。吾人は、廢趾が、建設と自然の破壞力との間の爭鬪の歴史を語るのを見たり聞いたりする。或は又、襤褸は、新い衣裝が語る事の能さない人間運命の歴史を語るのである。されど之は、人間の運命に就いて語る事により、人間そのものに就いて語つたり、その人間に人間的に近接せしめたりする。或は又、顏面の波や皺は、その人間の歴史、即ちそれが耐持した勤勞と辛苦、希望と憂慮、喜悅と苦惱との歴史を語るのである。

吾人は今、凡て此の種の要素をば、それ自身として擧述した。けれども此等のものは、甚だ多樣に綜織され得る。吾人は顏の波や皺がその歴史を語るというたが、之と

共に、此等は直接に、特異なる精神生活の帶有者となり得る。第一に、花咲く所の身體生活の思想が消失した故に、特殊の精神的のものは、優勢に現出する。尙その外に、此等は、合經驗的に、人間の年齡並に年齡の記號に結合されてある所の精神的のものゝ表出となり得る。

或は又、第二に、黃くなつた秋の木の葉は、曾に歴史、即ち過去つた夏の歴史を語るのみならず、此の中に於て又直接に、特異なる自然生活を表示する。特異なる自然生活とは、沈靜にして神秘的意義と憧憬的悲哀とを有する或るものであつて、かゝるものをば、吾人は内部的に共同體驗をなし、さうして夏の光明生活よりもより深く吾人の中に透徹せしむるのである。

最後に、悲劇又は滑稽に關し吾人が前に言明した所のものを茲に附加せねばならぬ。それは、吾人を束縛固持し、吾人をして有價なるものをより十分に享樂するに至らしむる所の不可存在物の力、即ち有價なるものが活動して正當の位置を占ひべしといふ、滿足されない要求の力といふものである。さうして此の外に尙、反對、攪亂、

闘爭、不協和といふ形に於て美の中に進入し、それに從屬し、かくて美の藥味として醜が取得する所のより一般的なる價値も存するのである。

五　「理想的」の美

醜の表現の可能といふ問題に關しては、その單なる表現又は單なる表現物が、醜を美に轉じ得る力を有するといふ神秘的思想は之を排斥せねばならぬ。成程醜に於ける表現は、美をば美的觀照に對して卓出せしむる事は能きる。されど又結局する所、美なしに何等の醜はなく、否定される所の肯定なしに否定なく、否定が遭逢する所の生活なしに生活否定は存しないのである。

此の種の卓出は、是理想化の作用である。併し之は欺瞞或は扮飾といふ意義に於てではなく、之に反し理想的のもの即ち積極性のものゝ形成といふ意義に於てである。醜の表現なるものは、吾人が生活に於て先第一に消極性のものを見、隨つてそれを否定する場合に肯定をする。醜の表現に於ける藝術の「理想主義」なるものは、此の如き實證主義に於て成立する。さうして此の種の理想主義は、是藝術上の實在主義と同一

物である。

此の外、此の語の甚だ異なりたる意義に於ける一の理想主義がある。それは、之若くはそれ、若くはそれ〳〵の特質を有する所の美ではなく、謂ゆる「理想美」なるものを夢みる所の理想主義であつて、此の如きものも亦排斥すべきである。人間の美なるものは、男性美又は女性美である。それはちやうど、美なる線が直線か曲線かであると同樣である。最後に、各の美なる事物の美は、それに特有なるものであつて、さうして各の他の美なる事物の美とは異なつて居る。一般の美といふものは是全然抽象性のものである。然るに之々の限定せる美というたなら、之は美の無限なる多樣中に於て與へられてあるのである。

更に他方に於ては、各の美は、それが美の一般的合法性の實例である限りに於ては一般的のものである。各の美の內容なるものは、吾人が、人間本質の一般的法則に基いて吾人の中に於て形成する所の理念的自我である。各の美の中には、よしや人間本質の一方面であるとはいへ、兎に角一般の人間といふものが與へられてあるのである。

されどそれが此の如くあるといふ事は、一の美が兩極端の中間を表現するといふ事を妨げない。更に又、吾人が既に知得せる如く、個々の美なるものに於ては、ちやうどかゝる個々のものに對して顯著にして特性的のもの、或はそれが屬する所の類に對して範型的である所のものが卓出され居るといふ事を妨げない。或は終りに、一の美に於て、一の存在及び態度の最も一般的なる合法性が、吾人の直觀に供せられるといふ事を妨げない。更に又、凡て此の種の「個々の特質」、「一般的範型」及び「抽象的普遍」をば、理想美と稱し、その表現或は卓出をば理想主義と稱するのである。

併し又先第一に、「理想美」といふ名稱の下に於ては、いふ迄もなく、それ自身に於て醜なるもの、壞亂せるもの、不協和のものを最も少く己れの中に受納する所の美が思念される。即ち光明と生活とが、可能的純粹にその位置を取得して自由に活動する所の美、更に簡言すれば、衝突なしに心持良くならしむるといふものが思念される。之に關して注意すべきは、此の如き理想美を以て、直に最高最深の美の意義に於ける理想美と同一視するのを避くべしといふ事である。

六　「感官的」の美と精神的の美

最後に又、「理想美」の概念は、尙他の方法に於て使用する事が能きる。即ち此の場合に於ては、理想美の反對に立つものは、感官的の美たるのである。

凡そ如何なる美と雖も、純然たる感官的のものではない。或は如何なる感官的のものそのものが美であるのではない。されど又吾人は美を區別する事が能きる。それは一つは感官的のもの、或は感官的に知覺さるべきものに近接し居る所の美であつて、一つは、之と遠隔し居る所の美である。言ひ換へると、いつでも感官的のものでない所の美的內容が、より直接なる方法に於て、その感官的帶有者に結合されて見ゆる所のものと、それが間接なる方法に於て結合されて見ゆるものとである。吾人は前種の美をば感官的の美、後者をばより非感官的の美、或はより理想的の美と稱する。

特に二つの範圍に於て此の對立は發見される。吾人は既に知得したのである。言語といふ覺觀的元素の生活は、かゝる感官的のものにより直接に帶有された生活であつて、吾人はその中に於て此の生活を發見する。吾人はかゝる聽覺的元素そのもの、卽

ち語の音性質とか脚韻とか韻律とかに觀照的に吾人を打任す事により、之を體驗する。かゝる元素の美は是「感官的」の美たるのである。

此の種の美に對立するものとして、その語が表出したり意味したりする所のものゝ美、卽ちその語の美的印象性の意義の美といふものが存在する。かゝる美は是感官的に與へられたるもの、卽ち聽取された音及び音結合の美、隨つて「感官的」の美ではない。此の故に之をば、より理想的の美と稱するも差支ない。此の如きものに於ては吾人は、美、卽ち吾人の享樂に迄提供せらるゝ所の生活を享樂する爲に、音及び音結合を透して、その意義の中に注目せねばならぬのである。

次に第二の範圍に於ける對立者も之と同樣である。世に、人間の形に於て直接に吾人に對して存する所の人體の形の生活といふものがある。之は此の故に、吾人が身體生活と稱する所の生活である。勿論此の種の生活も、凡ての生活と同樣に、精神的のものである。それは卽ち意志であり行爲であり自己感應である。されど吾人は此の形に觀照的に吾人を打任せ、その經過を追隨する事により、直接にそれを發見する。さ

うしてかゝる生活の故に此の形が有する所の美を稱して感官的の美と呼ぶのである。

此の種の感官的の美に對立するものとして、狹義に於ける「表出」の美、卽ち特に目及び口に存する所の感情的にして且つ知力的なる美がある。吾人は之がその中に「存する」といふ。けれども之は直接なる方法に於てその中に存するのではない。卽ち之は目及び口の形の美ではない。之は手早く吾人の上に到達しない。詳しくいふと、吾人が目及び口の形に觀照的に吾人を打任せ、之を各個に追隨し且つそれに於て立止まる事により、その特に「感情的にして知力的なるもの」、例へば喜悅又は悲哀、愛情又は憎惡、自尊又は屈從等を發見するのではない。之に反し吾人は、此の場合に於ても、感官的に與へられたるものを透し、且つ超越して、その奥底に潛む所のものに迄進み入りて注目するのである。要するに之に於ては、運動及び運動の力、簡言すれば身體生活が眞の感じ込まれたものではなく、之に反し、それは運動及び運動傾向に結合された感情的要素たるのである。

さはいふものゝ、かゝる對立は決して絕對的のものではない。その故は、身體の感

官的生活に於ても、或は又之を透しても、吾人はその奥底に潜む所のもの、即ち個體の勿論より一般的なる方法を感ずるからである。

併し又、かのやうなより理想的なる美、即ち特に感情的且知力的の美、或は狹義に於ける表出の美なるものは、最後に尙一度、いふ所の「氣分」といふものゝ中に存する所の美を想起せしむるのである。かゝる美は是一種特異にして且つ特殊の「理想的」なるもの、即ち感官的のものゝ奥底に潜む所の美である。之は、それに附着する所の曾述した、不確定、不可解、不可說といふ性質の爲に、更に二重の點に於てかゝる奥底に潜む事になるのである。

美學汎論 終

大正拾年一月十七日印刷
大正拾年一月二十日發行

【定價金五圓八拾錢】

美學汎論 奥付

著者 稲垣末松
發行者 河本俊三 東京市麴町區隼町二十番地
印刷者 奥村紫樓 東京市麴町區隼町二十番地
印刷所 洛陽堂印刷所 東京市麴町區麴町二丁目九番地

製本 不許複製

發行所 洛陽堂 東京市麴町區隼町二十番地
電話九段九六六番 五一一番
振替東京二〇九一四番

AI. 1.

終